

講

演

(本紀要所載論文は凡て署名者の責任にして本會の意見を代表するものに非ず)

明治天皇の聖蹟と御聖徳

明治天皇聖蹟保存會長
侯爵

西郷從徳

明治天皇の聖蹟を御保存申上げたいと云ふ國民的熱望は、崩御後直ちに起つた事である。御陵が御遺旨に因つて伏見桃山と定まり、次いで其の神靈を奉祭する明治神宮が東京代々木に建設される事に成ると、明治神宮の御分社を造つて日夕奉拜したいと云ふ熱望が各地方から續出したが、それは許されなかつたので、せめては之に代へて各地に遺されてある明治天皇聖蹟を永久に保存し、聖徳を追念し奉る事としてはどうかとの議が或る方面に起つた。此の提議には大分賛成者も多かつたが、經費などの問題もあつて進捗しないのでゐるうちに、宮城縣の大平と云ふ人が非常な熱心を以て諸方に奔走し、遂に保存會

の成立を見て、昭和八年度には議會の協賛をも得、豫算も出來、其の十月三十一日に初めて四十餘箇所の聖蹟を指定するに至つたのである。現在の所、各地の聖蹟は、何れも其の地元の人が極めて大切に致してゐる。或る處では、御殿として七五三繩を張り廻らし、一切使用せず、又、妄に出入することを禁じてゐる。仙臺の或る聖蹟の家などは、持主が三代も變つたに拘らず、嚴そかに七五三繩を張つて不淨を近づけず、二十六年間大切に保存し續けたと云ふ特殊の記録を持つてゐる。斯う云ふ風に行在所又は一時の御小休みの場所に成つたと云ふやうな記念の聖蹟は、永久に御保存申上げるのが日本臣民の眞情であるが、しかし何分にも個人の家には家運の盛衰と云ふ事があるから、涙を吞んで人手に渡すやうな場合もある。それ等の聖蹟は其の後どう成つたかと云ふと、大抵は親が失つたのを其の子が買戻してゐる。秋田縣・福島縣には其の種の例が各一つ宛あつて、何れも碑を立て、聖蹟を表示してゐる。なほ現に知られてゐるものゝ外にも、なほ幾多の聖蹟が遺存する事と思ふから、それ等が湮滅しない以前に各地の史蹟名勝研究會其他専門家の手に依つて、十分に研究し、確めて行きたいものである。

二

明治天皇の聖蹟を色々拜するにつけて、一層深く感佩せられるのは天皇の御聖徳である。親不知の山なども、樵夫でなければ容易に登攀の出來ないやうな嶮所であるが、そんな所も非常の努力を以て御踏

破遊ばされた。又、如何なる炎天、寒天にも一旦お立てに成つた豫定は曾て御變更に成つた事はなく、風雨にも關らせ給はなかつた。そして苟くも御巡幸遊ばされる先々は、決して只通御に成るのではなく必ず常に國民の爲を考へて、研究してお通りに成つた。

其の意味で、數ある聖蹟の中でも殊に時代の進運に關係の深いのは栗橋の南權現堂の堤である。あの堤は東京の水災に大關係のある處で、一旦あれが切れた日には江戸は水漬に成る外はなかつた。それを東北御巡幸の時に御親閱遊ばされて後、三條・大久保・木戸等の人々を集め、斷然その河川工事を國費で實行する事を定めさせ給うたのは、明治天皇の御英斷であらせられる。今日東京に水災を見なく成つたのは、全く此の時の御決定に基く事と、誠に恐れ多く感ぜられるのである。

次に稍趣の違ふ話であるが、新潟縣を御通過の時には、縣民の中に眼病者が多いとの事を聞召して、特に難有い思召で侍醫を後へ残させ給ひ、なほ金壹千圓の御下賜があつた。其の後同縣では眼科の専門療術が大いに進んだとの事であるが、これは全く御恩恵が基礎と成つたものである。

又、當時秋田の院内には政府經營の鑛山があつたが、明治天皇は畏くも採鑛業御獎勵の思召で鑛内の御踏査を遊ばされた。古來元首の御身を以て鑛内へ入らせ給ふと云ふ事は、和漢の歴史に例の無い所である。今に其の現地の秋田鑛業學校の卒業生は忍耐の強い事を以て知られ、大阪の工業家等は争うて雇

ひ入れると云ふが、これも天皇の御感化の今日に現れたものであらうと拜察されるのである。

なほ行幸先での御事蹟として誠に恐れ多く存ぜられるのは、天皇が馬匹又は刀劍類を愛好せさせ給ふ由を承つて、名馬又は家寶の銘刀古器物等の献上を願ひ出でても絶対に御受納なく、其日の中に必ずお下げ渡しになつたに反して、土地の農夫達が献上する大根とか、天然水等は皆御快く御嘉納遊ばされた御事で、御晝餐の時には、その冷水を桶でお汲みに成ることをお樂みと遊ばされた。

又、極めて細かい事にも御心を注がせられた御例話としては、東北地方で大演習のあつた時に、御野立場近く、參加師團としての第二師團歩兵第三十聯隊の兵士二名を召させ給うて、「兵役が辛いか」「早く自宅へ歸りたくないか」と云ふやうな御懇の御下問を賜ひ、兵士たちが何れも立派な奉答をするると、更に飯盒を出させ、朝飯の半分残つてゐるのに御目をつけさせ給うて、「それは何故に残したか」と御下問に成り、兵士が「節約の爲でございます」と申上げると、御満足の御様子で御下げ遊ばされた。

更に又、結城地方の大演習の時には、明治天皇が餘りに長くお目ざめに成つてゐらせられたので、報告を持つて出て、其の由を伺ふと、兵士が戦に勞してゐる時に將たる者が疲れを感じていゝと思ふかと御下問があつて恐縮した話もある。大器であらせられ乍ら斯ういふ細事にも亦御注意を遊ばされたのである。なほ明治天皇の御生平に付ても申上げたいが、こゝには聖蹟に關する御逸話のみを申し述べる。